

令和3年度  
心の輪を広げる体験作文  
障害者週間のポスター  
作品集

群馬県  
群馬県肢体不自由児協会





あいさつ

群馬県知事 山本 一太

「心の輪を広げる体験作文」、「障害者週間のポスター」の募集に多くの方々から御応募をいただき、深く感謝申し上げます。今年度は、県内の小中学校・高等学校等の児童・生徒の皆様から、作文の部で八十六作品、ポスターの部で二十四作品の応募がありました。どの作品も、障害のある方とない方との関わりを通じた思いやりの心が表現されており、将来を担う若い皆様の心に、このような気持ちで育まれていることをとても嬉しく思います。それらの作品の中から、十七作品を優秀作品として表彰することにいたしました。

県では、昨年度、群馬県の障害者施策に関する総合計画である「バリアフリーぐんま障害者プラン8」を策定し、「全ての県民が、障害の有無にかかわらず、互いに人格と個性を尊重し合いながら、地域で共に暮らし、支え合い、安心して暮らすことができる共生社会の実現」に向け、様々な施策に取り組んでいます。この作文・ポスターの募集もその一環として実施しており、今年度の優秀作品をまとめたこの作品集を、多くの方々に御覧いただくことで、障害や障害のある方への理解と関心がさらに高まることを期待しております。

結びに、作品の応募に当たり、御協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げ、あいさついたします。

令和三年十二月

## 入賞作品

### 心の輪を広げる体験作文〔知事表彰〕

#### ■小学生部門

最優秀賞	思い込みのかべ	渋川市立豊秋小学校	五年	高橋 優音	1
優秀賞	やさしいお兄ちゃん	桐生市立菱小学校	二年	田村 耀明	3
佳作	お兄ちゃん	前橋市立桃井小学校	五年	中島 梓咲	4

#### ■中学生部門

最優秀賞	私のいところ	前橋市立木瀬中学校	一年	荻野 奈菜	5
優秀賞	障害者と共に	太田市立城東中学校	三年	高橋 裕哉	6
佳作	本当のやさしさ	邑楽町立邑楽中学校	二年	井上 玲菜	7

#### ■高校生・一般部門

最優秀賞	障害者に対する偏見	群馬県立伊勢崎興陽高等学校	二年	田沼 優月	8
優秀賞	なぜ、世間の目は怖いのか。	群馬県立伊勢崎興陽高等学校	三年	井桁 羽菜	10
佳作	見ているだけじゃわからない	群馬県立伊勢崎興陽高等学校	二年	小林 紗佳	12

### 心の輪を広げる体験作文〔肢体不自由児協会会長表彰〕

#### ■中学生部門

障害者と私達

邑楽町立邑楽中学校

二年 田部井 里桜

……

15

#### ■高校生・一般部門

障害とは

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

二年 石川 ほのか

……

16

## 障害者週間のポスター【知事表彰】

### ■小学生部門

最優秀賞

おばあちゃんと私と弟でさんぽ

前橋市立永明小学校

三年

町田

莉々愛

### ■中学生部門

最優秀賞

どんな人でも夢は叶えられる（eスポーツ）

藤岡市立西中学校

三年

室田

夏希

優秀賞

輝く未来へ

伊勢崎市立第一中学校

三年

熊谷

嘉人

佳作

可能性は無限大

太田市立太田中学校

三年

久間田

奏

## 障害者週間のポスター【肢体不自由児協会長表彰】

### ■小学生部門

みんななかよし みんなえがお

前橋市立永明小学校

一年

黒澤

架映

### ■中学生部門

助け合える社会へ

高崎市立第一中学校

三年

桑子

美咲



心の輪を広げる体験作文

【知事表彰】







## 思い込みのかべ

洪川市立豊秋小学校

五年 高橋 優音

「わっ。びっくりしたー。」

急にぼくの頭に手がのびてきたので、ぼくはとっさに父にしがみついた。

「おどろいたよね。このおじさん、頭をなでたかったんだって。」

と、施設の生活指導員の人を教えてくれた。そうだったのか。ぼくは、よけてしまったことを申しわけなく思った。これは、ぼくが小学二年生のときに、初めて障害者支援施設へ演奏をしに行ったときのことである。

ぼくは家族で、ジュニアオーケストラに所属している。ここでは、訪問演奏という活動をしていて、障害者支援施設にも行く。去年初めて行った施設では、職員さんが案内をしてくれた。この施設は、車いすの人や目が見

えにくい人、そして精神遅滞の人が利用しているそうだ。

「精神遅滞って、何？」

ぼくは家に帰ってから、母に聞いた。すると「以前は、知的障害とよばれていた人のことだよ。」

と、教えてくれた。ぼくは、どうしてよび方が変わったのかを考えてみた。辞書で「知的」と「障害」の意味を調べてつなげてみたら、「考えたり物事をはんだんする力が弱く、じやまになる」となってしまった。これはひどい！人に対して使ってはいけない、差別的な言葉だと思った。ぼくと同じように感じた人が多かったので、「精神遅滞」に変わったのかなと思った。

ある訪問演奏のとき、ずっと「かわいい」と言っている人がいた。ぼくを見ても、かわいいとくり返し言うので、ぼくは女の子ではないよ、と言いたくなってしまった。演奏が始まり、ぼくはバイオリンを一生けん命に弾いた。途中で、利用者さんたちにタンバリンやカスタネットが配られ、一しょに合奏をした。その人はまた「かわいい」と言いながらタンバリンをたたき、ニコニコと楽しそうだった。ぼくは、この人は場面に適した言葉がうまく使えず、「かわいい」を代わりに使っているのではないかと思った。どういう意味で「かわいい」を使っているのかな？と、そのときそのときの気持ちにより例えば、この人の言いたいことが分かる気がした。きっとぼくのこと、女の子だと思っているわけではなかっただろうし、ぼくたちの演奏も「上手だね」とか「ありがとう」「楽しいよ」という気持ちで聴いていたのだと思う。

ぼくが訪問演奏に参加するようになって、三年がたった。始めのころは、施設利用者さんとの交流の仕方が分からなかった。みんな、これから演奏が始まる、ということをは分かっているのかな？と思ったこともあった。あいさつをしても返事がないときは、つまらない

のかな？と、心配になったこともあった。でもそれはちがった。ぼくはこの三年間で、障害を持つ人に対して、勝手に決めつけて思い込んではいけないうことと、相手のことを知る大切さに気づくことができた。もう、頭の上で急に手がのびてきても、きつとぼくはおどろかない。

精神遅滞者と「話すことでの交流」は、ぼくは今でもむずかしく感じる。でも「音楽を使った交流」なら、ぼくにもできる。音楽は、人の心を開いてくれる。だから、まずぼくは音楽の力を借りて、様々な障害を持つ人との交流を続けていきたい。そして、街でこまっている障害者を見かけたら、「思い込みのかべ」を作らず、声をかけて手助けできる人になりたい。



## やさしいお兄ちゃん

桐生市立菱小学校

二年 田村 耀明

お兄ちゃんと、しゃべれたらいいなと思います。ほくのお兄ちゃんは、しょうがいがあるからか、しゃべれません。

いつもいえにかえつてくると、「テレビをつけて」とリモコンをもってきます。そしてテレビを見ながらわらっています。こえにだしてわらいます。だから、ほくとお兄ちゃんとでしゃべれたらいいなと思います。

お兄ちゃんは、ほくから見ても目がくりくりしていて、かわいいです。でも、もう高校生なので、せがたかいし力もつよいです。お兄ちゃんにのられたり、つかまされるといいです。がまんするときもあるし、お兄ちゃんがくる前ににげるときもあります。

お兄ちゃんは、なんでもこわしてしまっし、

やぶいたりはがしてしまいます。ほんとうは、そういうことはだめだと思うけど、しかたないなと思います。

お兄ちゃんは、土曜日や日曜日に中学までならった学校のほうまで、いえからあるいています。ママは「ウォーキング」とよんでいます。たくさんあるいたり、さかみちをのほったりします。ほくもときどきいっしょにあるときがあります。つかれるけど、お兄ちゃんはがんばっています。

お兄ちゃんがころんだり、けがをしたりするとかわいそうなのでしんぱいになります。お兄ちゃんは、できないこともいっぱいあります。パパとかママがてつだっています。

お兄ちゃんだって、できることならじぶん

でやっています。ほくもたまにてつだっています。ほくがてつだったとき、お兄ちゃんはうれしそうです。まえは一年生だったけど、いまは二年生だからじぶんらしくてつだっています。てつだうのはたのしいです。

ママはいつもたいへんそうだけど、お兄ちゃんのことをしてくれるから、ほくはうれしいです。ママのこともいっぱいてつだいたいです。

ほくがお兄ちゃんのちかくにいくと、お兄ちゃんはわらいます。お兄ちゃんはたぶん、うれしいんだなと思います。

ほくも、お兄ちゃんがいつもそばにいてくれてうれしいです。

ほくは、そんなやさしいお兄ちゃんが大好きです。

## お兄ちゃん

前橋市立桃井小学校

五年 中島 梓 咲

私のお兄ちゃんは、みんなとちよつと違

ます。なぜみんなと違うかというと、言葉がうまく、しゃべれなかったり、同級生と同じ勉強に、ついていけなかったりします。だけど私にとっては、ふつうのお兄ちゃんです。なぜそう思ったかというと、お兄ちゃんは私にやさしくせつしてくれるし、いっしょに遊んでくれます。だんだんそのうちにふつうのお兄ちゃんだと思いました。

すごいと思った所は、知らない人に話したり、外国人とも話せたりすることがすごいと思います。私のお兄ちゃんは、みんなができることは、あまりできませんが、ぎゅくにみんなができないことができると思います。たとえ障害があったとしてもその人ので

きることがあると思いました。

たまにお兄ちゃんが友達と話しているとき相手がうまく聞きとれないときに私がつうやくをしているときがあります。そうすると相手の人もわかってもらえて、お兄ちゃんにもたくさん友達ができます。なぜ私がつうやくができるかはわかりませんがたぶん毎日いっしょに生活しているからだと思います。

いちばんたのしいと思ったときはいっしょに遊ぶときです。とくにいちばん楽しいと思った時は、ゲームで遊ぶときです。わたしもゲームはとくいな方なのでお兄ちゃんとゲームをしているときがいちばんたのしいです。ゲームをいっしょにしているときは、お兄ちゃんも楽しそうなのでとても私もうれし

くなります。これからもいっしょにゲームをしていきたいです。

私はこれからお兄ちゃんとなかよくしていきたいです。これからもつうやくをいっばいしてお兄ちゃんに友達がいっばいできるようにがんばっていきたいです。お兄ちゃんのことはずっとだいすきです。

## 私のいとし

前橋市立木瀬中学校

一年 荻野 奈菜

私はいとしにダウン症の子がいます。そのいとしは生まれたときに心臓に穴が空いていて手術したり、耳が聴こえにくいので補聴器をつけて生活をしていています。

ダウン症候群は世界各国で約千人に一人の割合で生まれます。特徴としては、発達が全般的にゆっくりです。体に関しても全体的に筋肉量が少ないのも特徴です。またいとしは耳も聴こえにくいので言葉があまりはつきりしていません。

いとしの特徴は元気で明るい性格なところ。よく笑い、人を笑わせることが好きでとても人懐こいです。人も好きです。私のいとしはダウン症ですが筋力がとてもありません。

私のいとしは今小学一年生ですが発達はまだ三才くらいです。言うことをきかず家族みんな大変です。でもとてもかわいくていやされません。ダウン症は発達がゆっくりな分かわいい時期がたくさん味わえると私は思っています。体はまだ小さくてかわいいです。学校は、特別支援学級に通っています。

私が今までのことと七年間生きてきて楽しく印象に残っていることは初めて一緒にテニスパークに行ったことです。乗り物に乗った写真をとったり、買い物したことが印象に残っています。あとプールを一緒に行ったことも楽しかったです。でも一番印象に残っているのは高崎サンピアで福祉に関するイベントに連れて行ってもらう、そこで点字の作り

方を教わって自分の名前を点字にして表したことです。実際に作ってみて目が不自由な人が点字で字を読み取っているなんてすごいなと思いました。他にもたくさん福祉に関するイベントにも参加しました。

私は、いとしと生活をする中で、障害がある人への印象が変わりました。ダウン症やほかの障害についてくわしく調べたり、実際に触れ合ったりするようになりました。もし、いとしがいなかったらいろんな体験ができていないと思うので本当にいとしが生まれてきてくれてうれしかったし、福祉に関するイベントにも参加できたので良かったです。みなさんの周りでもどこか体などが不自由であったり、何かが苦手な人達に出会ってもその子なりの良さを見つけて仲良くしてあげてほしいなと思います。

## 障害者と共に

太田市立城東中学校

三年 高橋 裕哉

障害者とは、身体・知能・精神的に何らかの障害がある人のこと。ベッドに寝たきりの人もいれば、どこに障害があるのか、外見では分からない人もいる。程度が違うのなら、求めるサービスも、人それぞれだと思う。今の福祉制度は、どうなっているのだろう。必要な人に必要なサービスが届いているのだろうか。ひいばあちゃんが、介護サービスを受ける時に、少し聞いたただけけど、何段階かに分けられているだけで、結構おおよっぱだなと思った。一人一人に合わせた細かいサービスは難しいのだろうか。判定の段階を細かくしたり、項目を増やしたりすることは可能

な気がする。サービスを提供する側と受ける側の意識の違いだろうか。

障害者は弱い人、かわいそうな人、気の毒な人、という意識を持っている人が多いと思

う。「かわいそうだから助けてあげよう」という気持ちは、優しさならいいけど、自分が優位に立って、上から目線で見下すようなことはやめよう。

障害のない人を健常者と呼んでいるけど、健常者だって、得意なことと不得意なこともある。「できないことがある」という点では同じではないかと思う。普段の生活の中でも、みんなが助け合って生きている。妨げとなるものを取り除くのが「バリアフリー」。それなら全部がバリアフリーにしまえば良いと思う。障害者が使いやすいければ、健常者も使いやすいはずだ。赤ちゃんから老人まで使いやすいければ、わざわざ「障害者用」を作る必要はない。障害者と健常者の間にある意識もバリアフリーにしていきたいと思う。同じ人間として生まれてきたのだから、人間社会

と一緒に生活することは当然のことだと思う。

テレビで、指一本でできるボランテアを「ちょボラ」と呼んでいた。車椅子の人がエレベーターに乗る時にボタンを押してあげることだ。車椅子の人がボタンに手が届かない時や押しづらい時は、手を貸してもいいけど、ボランテア。ボランテアと言っても必要以上の手助けは要らないと思う。できない事は協力するけど、できる事は自分でやってもいいのではないかなと思った。何から何まで手を貸す必要はない。親切が、おせっかいにならないように、優しさが、同情・あわれみにならないように気をつけたいと思った。冷たい人と言われそうだけど、同じ目線で対等に付き合うなら、気の使いすぎはかえって、失礼になると思う。

誰でもみんな一生懸命に生きている。できることも、できないこともある中で暮らしている。そして、必ず個性をもっている。障害も個性として考えれば、長所と短所くらいの感覚になるだろう。障害があっても生活に支障がないと言えるくらい福祉制度が整い、不自由ではない生活が送れる社会になればいいと思う。

## 本当のやさしさ

邑楽町立邑楽中学校

二年 井上 玲菜

私は昔、障害を持った男の子と友達でした。

幼い頃は、障害なんて気にもすることなく話したり、遊んだりすることは当たり前。これから先もずっと仲良くできると思っていました。しかし、時間が経つにつれて、私の周りには障害という理由だけで、その子を無視したり、差別するようになりました。挙げ句の果てには、バイ菌扱いをするようにまでもなったのです。でも私は、周りの友達を止めることができませんでした。自分が同じ目に合うことが怖くて、ただ見ているだけ。その子のために何も力になることができませんでした。

「可哀想」

私は、障害を持っているから周りから酷い目にあっているその子に対して、同情するようになってしまったのです。それからの私は、

何もできない、役立たずな自分を見ているのが嫌で、その子が困っていたらなんでも手伝うようになっていました。それは、その子のために力になれない自分を見ていると、情けなくて嫌いになるから。

「どうして先生は、障害を持っているその子に対して、私のように何でも手伝わってあげないのだろう。」

障害を持っているからこそ、してあげなければならぬことが沢山あると思っていました。だから私は、なぜ先生が注意をしてくるのか不思議で仕方がなかったのです。

ある日、私は先生と障害について話す機会がありました。その時、私はこう言われたのです。

「障害を持っているからって、相手のために全てのことをやってあげるのは、決して相手

のためではない。できることはきちんとやらせないで、今はいいかもしれないけど、将来苦労するのは相手の方。君がずっとその子と一緒に居るわけではないのだから。」

私は、この言葉を言われた瞬間、心を打たれ何も喋れなくなっていました。なぜなら、今まで抱いていた疑問が全て解けたからです。私は、その子の将来のことなんて考えたことがありませんでした。今のことだけ。私のその子への優しさは、本当の優しさではなかったのです。かえって相手をダメにしていく。先生は、私の誤ちをずっと伝えようとしてくれていたと気づくことができました。

私は障害を持っている人のためを考えて行動することは、とても難しいと思います。自分分は、相手のためを思ってた行動でも、将来的に見ると、相手のためになっていないことが多いからです。本当の優しさとは何なのか、多いから。私は、今のことだけでなく、相手の将来のことも考えてあげることだと思います。みなさんも障害を持った人が暮らしやすい社会を作っていくために、自分が思う本当の優しさについて考えてみてください。

## 障害者に対する偏見

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

二年 田 沼 優 月

「障害者」と聞いた時、一番初めに何を思うか。口には出さないけれど、嫌なイメージを持つ人はいるのではないか。偏見のせいでも苦しんでいる方はたくさんいる。ましてや、実際に悪口を直接言われたり暴力を振われたらどんなにくだらぬだろうか。

五年前の七月二十六日。神奈川県津久井やまゆり園で、悲惨な事件が起きた。それは障害者施設、津久井やまゆり園の元職員が入所者十九人を刺傷し二十六人に重軽傷を負わせた事件だ。私はこの追悼式をニュースで見た時、五年前を思い出した。この施設に知っている人がいるわけではなかったけれど、涙が出てきた。どうして、何もしていかない人が殺されなければいけなかったのか。犯人はなぜ

罪のない人を殺したのか。そんな思いが頭の中でぐるぐると回っていた。犯人は、「重度障害者を安楽死させれば世界平和につながる。」と言った。一人の偏見で十九人も殺されてしまった。あつてはならないことだと思う。

この犯人が障害者についてもっと理解があれば、十九人の方は殺されずにすんだ。職員として働いている時に何かあったのかもしれないけれど、こんな残酷な事件は起きてはならない。同じような事件が起きないようにするにはどうすれば良いのかを考えた時、一番大切なのは障害者への正しい知識だと思った。

私も中学生で一人の女の子の同級生と会う

までは少なからず偏見はもっていた。障害者というと、知的障害者や精神疾患の方を想像して、怖いというイメージをもっていた。でも、この子に出会って私の考えはとても変わった。

私の中学校には、特別支援クラスという教室があり、その子はその教室に通う唯一の女の子だった。体育や音楽の時だけ、私たちと一緒に授業を受けていた。その子はとっても活発な子で、人見知りの私でもすぐに親しくなる事ができた。とっても笑う子で私は大好きだった。途中から、あんまりクラスに行けなかった時も、その子の教室でDVDを見た。今思うと、はげましてくれていたのだと思う。そんな優しく、思いやりがある子だと私は知っていたけれど、一部の子どもは知らなかった。男子からは悪口を言われているのを聞いたことがあったし、女子からは距離をとられていた。少数の人たちだったけれど、本当の姿を知っている私からすると、とてもつらかった。

私はこの子に出会ったことで、障害をもついても明るくて思いやりがある人もいるという事を知ることができた。同時に、差別や偏見は無くなってほしいと思いはじめた。

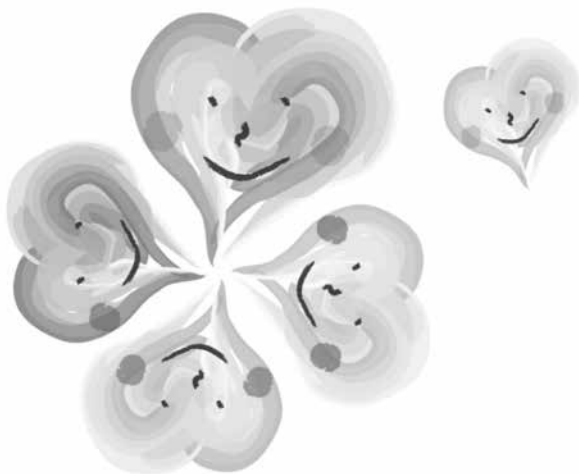


昔の自分のように、根拠なく決めつけている人はきつとたくさんいると思った。

私は中学二年生の時に、「青い鳥」のボランティアにも参加している。これは、障害児音楽サークルだ。あるイベントで、青い鳥のメンバーが歌うことになっていて、一緒に、私たちも歌うというボランティアだった。自分達の出番になるまでは、出店を回ることができ、私は二人の青い鳥のメンバーと楽しく回った。その二人も全く怖い感じではなくかわいくて元気な子だった。いっぱい話してくれるし、私はとても楽しい時間となった。歌も振り付けもみんな上手で驚いた。たくさんの方が見ている前でこんな風に歌えて私よりすごいと思った。

私はこの二つの出来事をきっかけに、障害者への偏見を無くすことができた。たしかに、中には私が思っていたような怖いと感じる人もいると思う。でも、それは一部の人ではなかった。このことを、もっとたくさんの方が知ってくれば、初めに書いたあのような事件が二度とおこらない。そのためには、私のように家族や親族に障害をもった人がいない人が、障害のある人とふれあえるような環境が必要だ。日本という国から、様々な偏見が

無くなるように、もっと力をいれてほしいと思う。私は、偏見によって苦しんでいる人が一人でもいなくなっしてほしい。



## なぜ、世間の目は怖いのか。

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

三年 井 桁 羽 菜

障害のある方に必要なことはなんだ。なぜ同じ人間なのに、障害のある方が差別や偏見を受けたりするのか。逆に、特別扱いされるのはどうしてだろう。それは障害のある方が必要としているからだろうか。また、望んでいることだろうか。

学校の授業の一環として、頸髄損傷で車椅子生活をしている方が、「世間の目で怖い思いをした。だから、心のバリアフリーが発展していったほしい。」とおっしゃっていたため、障害についての研究を行った。私は、実際に車椅子で駅から電車に乗り、ショッピングモールで買い物を行い、世間からどう見られているのか、また、車椅子の人はどういった風に世の中を見ているのかを調査した。ま

ず、実際に体験して気づいたことは、いろいろな場所で車椅子に注目が集まり、さらに目の前で歩いている人の顔があたり前に高いため、上から見下ろされている感じで恐怖を覚えた事だ。また、ショッピングモールのある店で車椅子で一人で買い物しようとした際、スタッフが二人でこちらを見ながらコソコソと話しているのが見えた事だ。「あのお客さん、車椅子だから対応してあげて。」などの内容の言葉を交わしていたのかもしれないが、こちらからしたら何を話しているか分からないため、悪口を言われているように感じた。さらに指もさされ、いてもたってもいられなくなりすぐに店から出てきてしまった。車椅子で移動している私に優しく声をか

けてくださった店員さんやお客さんがたくさんいたことにより、こういった行動や対応が目立っていた。さらに、私は一つ気になったことがある。食べ物を買った時、受け取り口が高いのにも関わらず、車椅子ではギリギリ届かないくらいの距離で渡された事だ。これは、「優しい対応」なのか。それとも「過保護でないため良い対応」なのか。私は授業で「過保護な援助は、生きたいと思う心を殺すことになる」と学んでいる。それをふまえてどちらなのか。私は、「優しくない対応」だと思った。「受け取り口が高い」という現状をみると、現在の日本はバリアフリーが進んでいない事がわかる。駅から出てすぐの横断歩道の坂が急すぎて自力でなかなか止まることができない。どこもかしこもガタガタ、凹凸の道。横断歩道と歩道の境目に必ずある段差。車椅子の自走はすごく危険だった。このように、バリアフリーが進んでいないことは車椅子で移動してみても初めて知ることができなのだ。もしバリアフリーが進んでいるのであれば、店員は障害のある方にも健常者と同じ対応をしたと思うし、それが「過保護でない良い対応」だと思う。つまり、道や建物といった物的環境にも要因があることがわか

る。

これらの体験を通して、二つ提言を行いたい。まず一つ目は、バリアフリーやユニバーサルデザインを当たり前にする。そうすることにより、障害のある方は特別扱いをされない。バリアフリーやユニバーサルデザインは誰かに聞くだけ、調べるだけで全く知識として身につかない。見て、触れて、試して、やっとバリアフリーやユニバーサルデザインのとがわかる。社会がそれで溢れ返れば、障害のない方やバリアフリー、ユニバーサルデザインを知らない方はそれをきっかけに知ることができると思うのだ。

そして二つ目、小学校からの福祉教育を変える必要がある。小学生の頃、福祉の授業で車椅子に乗ってみたり、高齢者や障害のある方の疑似体験を行ったと思う。その時の私たちは、「体験してみても、すごく大変だということがわかった。」「こういう生活をしていることがわかった。」という感想を書いて終わり。実際、私もそうだったことしか考えていなかったし、今の小学生もきっとそうだろう。しかし、その先を考えなくてはならないのだ。「だから何をすれば良いのか。」が大切だと思う。小学生の頃からそれが分かっていたら、

大人になっても忘れることはないだろうし、次の世代へと知識を受け継ぐこともできると考えた。

この二つの提言を行った理由、それは、障害のある方に一番必要なことは、周りが理解することであると思ったからだ。しかし、私がかここで提言を示したとしても、すべてが解消するわけではない。バリアフリーやユニバーサルデザインについてを考えた時、小学校の福祉教育を変えたりして実行するのは、長い年月がかかるだろう。だが、車椅子を使用している方はもちろん、ほかの障害を抱えている方々が心地良い日常を過ごしていただくために、今、動き出すしかない。



## 見ているだけじゃわからない

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

二年 小林 紗 佳

障害への理解がある人は少ないのではないかと思います。なので、私が実際に障害のある子と関わった時のことを話し、たくさんの人に理解してもらえたらと思います。

私が小学一年生の時、同じクラスに障害のある女の子がいました。どんな障害があったかは覚えていませんが、見た目は普通というのは違うかもしれませんが、普通の女の子でした。その子は朝の会、帰りの会、昼休みにだけ教室にいました。私は当時、障害についてほとんど知らなかったので何も考えずにその子に声をかけました。するとその子は「うるさい」「話しかけるな」と言いました。私は驚いて何も言えず、先生が私に謝ってくれた時も返事ができていなかったと思います。

今までそのようなことを経験したことがなかったので怖かったのかもしれませんが。そして、私は次の日もその子に声をかけました。前の日に話しかけるなど言われたし怖いと思ったのになぜ声をかけたのか自分でも不思議です。そして、その日も色々言われました。ですが、私は次の日もその次の日もその子が来る日は毎日声をかけました。一度もいい返事をされていなかったのにめげずに声をかけに行っていたことは自分のことですがとてもすごいなと思います。そして、いつからか私の名前を覚えてくれたようですが、「すずか」ではなく「すずめだ」「すいかって名前でしょ」などと言ってくるようになりました。名前をしっかりと呼んでもらえないのは悲しかったけ

れど、最初の時に比べると返し方は優しいし、名前を少しでも覚えてもらえたことは嬉しかったです。そして、その子が来る日は毎日話しかけた結果、一年生の三学期には仲良くなり、しっかりと名前を呼んでもらえるようになりました。それがとても嬉しくて、毎日話しかけて良かったなと思いました。二年生になったらもっと仲良くなり、お互いの家に行って遊ぶようになりました。ですが、三年生になってクラスは離れてしまったし、その子といつも一緒にいた先生が他の学校に行ってしまうその子は学校にあまり行かなくなってしまうようでした。なので、それからはほとんど会うことができず、そのまま卒業しました。私はもつとその子と話したかったと今でも思います。その子は私のことを忘れてしまっているかもしれませんが、私はその子に会いたいです。その子は確かに障害があり他の子とは違うところもありましたが、その子は私にとって他の子と同じような友達でした。私は障害のある子に関わったのでこのように障害のある人となない人での差をあまり感じていません。障害のある人もない人と同じように笑ったり遊んだり好きなことがあるのです。障害のない人との差なんてほとんどあ

りません。ですが、見た目が少し違ったり話し方が少し違ったりするだけで怖い、話しくそうと思ってしまう人がいると思いましたが、私は差を感じていないと言いましたが、もしかしたら見た目で怖いと思ってしまうかもしれません。ですが、それはその人と話してみればなくなると思います。障害のある人への理解が少ない一番の理由は「関わっていない」からだと思えます。関わっていないはその人のことがわかり、障害のある人への偏見がなくなると思いますが、関わっていないければ何もわからないから偏見をもってしまふのかなと思います。中学生になってから何人か障害のある人はいましたが、話しかけてた人は少なかったです。同じ学年の障害のある人はみんな男の子で、私は小学生の高学年あたりから男の子が苦手になってしまい、ほとんどの人と話せなくなってしまうので、障害のある人に話しかけることができませんでした。ですが、一人だけは小学生の高学年の頃だけ話せていました。その人とも他の人と同じような友達でした。ですが、その人とはだんだん気が合わなくなってけんかをしてしまい、そのまま話さなくなってしまうました。そんなこともあるなら別にわざわざ

障害のある人に話しかけなくてもいいのではないかと思う人もいるかもしれませんが、そのような経験をする事でその人のことを理解することができ、障害のある人となん人の差があまりないことがわかっていくと思えます。ですが、こんなことを言っても関わる機会がほとんどないと思えます。なので私は授業で習った「インクルーシブ教育」にすごく魅力を感じました。インクルーシブ教育は障害のある人となん人が一緒に学ぶことができるので、関わる機会がすごく増えるのでとてもいいと思えます。小学生の時、何で一緒に授業を受けられないのだろうと思っていたのですが、大きくなるにつれ別々で授業を受けることがあたり前になっていました。そのあたり前をなくして、すごくいいな思いました。インクルーシブ教育が増えれば関わる機会がものすごく増えます。そのようになれば、障害のある人への理解が促進されていくと思えます。また、テレビを見ていたらインクルーシブ学童というのをやっている人がいました。そこでの様子は障害のある子となん子が楽しそうに一緒に遊んでいます。私はその様子を見て、すごく感動しました、嬉しい気持ちになりました。私が経験してき

た中でそのようなことは全然なかったのと、今の小学生くらいの子は障害のある人に対する理解がある子が増えているのだなと思いました。理解のある子が増えることは、障害のある子の親にとってもすごく嬉しいことだと思います。実際に最初の方で話していた障害のある女の子と遊ぶたびにその子の母親に「ありがとう」と言われてしまいました。当時の私は何でお礼を言われているかわかりませんでした。今ではわかります。障害のある子と関わることで、たくさんの方が笑顔になれます。

障害のある人への偏見などはまだたくさんあると思えます。ですが、その人と関わってみたいと何もわからないので、たくさんの人に関わってもらいたいと思えます。



心の輪を広げる体験作文

【肢体不自由児協会会長表彰】





## 障害者と私達

邑楽町立邑楽中学校

二年 田部井 里 桜

私は生まれた時から、脳性麻痺という障害をもった従兄弟と住んでいます。今では施設にいますが、そんな従兄弟と今まであった体験談と周りの人との関わりを話していきたいと思います。

従兄弟の障害は、手足が不自由で上手く歩けなかったり動かせなかったりします。また、あまり上手に話すことができません。当然、一人では生活をする事ができません。なので、家族みんなで協力をしながらご飯をあげたり、車椅子を押して生活をしています。そんな中で、買い物や外食をする時があります。私達が歩いていたりすると視線を感じたりする時があります。白い目で見ってくる人たちもいれば、障害者を悪く思い陰口を言う人もい

ました。私は複雑な気持ちになったり、嫌な思いになりました。しかし、従兄弟はいつも前向きで笑顔でした。そんな姿を見て私は、いつも勇気と元気をたくさんもらっています。もし私が従兄弟の立場だったら、従兄弟のように明るく周りに振る舞えないかもしれない。なので、障害を良く思っていない人も理解できたら障害を抱える人々の笑顔がよくなるのではないかと思います。

私は友達と家で遊ぶ時があります。そのときに、私の友達はいつも従兄弟のことを悪く思わないで優しく接してくれます。そんな人が、世の中に増えたらなと思いました。私はそのときに、障害のある人とならない人との間に壁は無いのだなと思いました。障害者と私

達は支え合っていくことが大切なのだと思えてきました。障害を抱えている人達にそっと手を差し伸べることで、そうすることで私達は障害に対する考えが改めて深まると思えました。そうすれば、障害のある人、ない人が楽しく生きやすくなる未来があると思えました。また、お互いを思うこと尊重すること、どちらかが困っているときに助け合えることができます。それを周りに広げていくことで、よい関係が築けるのではないかと感じました。

障害のある人とならない人、それはお互いを尊重し合える人々だと思えます。注意をして周りを見れば、障害を抱え困っている人がいるかもしれません。そんなときは、迷わず気軽に一声かけてみて下さい。

## 障害とは

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

二年 石川 ほのか

障害って何なのかと、私は興陽高校の福祉系列に入り勉強するまで考えたこともありませんでした。そもそも、自分に障害がある人や身近に障害者がいなければ、障害について考える事などほほえないでしょう。でも、私は障害について少し考える事があったので、みなさんにお話しします。

私が障害について考えるようになったのは学校の授業がきっかけです。その授業とは、実際に障害者の方々が学校に来て、障害とは何かについてを考えていくというものでした。授業を始める前に、「障害って何だと思う。イメージを書いてみて。」と、紙が配られました。私は何も考えることなく、紙に「不自由なこと」と書きました。他の人も私と似た

ような事を書いていました。障害者の方たちは「授業が終わった時には、この紙に書いた考えが変わる人がいると思うよ。」と言われました。その時は、そんなことないと思っていました。そう思っている中、授業がスタートしました。いろんな話を聞いたり、ビデオを見たりしました。その中でも一番印象に残っているものがあります。それは、お店の外と中が描かれたイラストでした。このイラストを見て、障害者の方たちが不便だと感じる所を探すというものです。5人で一つのグループになり、皆で意見を出し合いながら探しました。一番に出た意見は、「お店に入るためには階段を上らなければならない。けれど、車イスを使っている人にとっては不便だ

と思う。」というものでした。私は、確かにその通りだと思いました。病院に行くと、階段だけでなく、スロープもあります。病院は車イスの方や、足腰が悪い人たちも来るので、そのような人たちに配慮して作っているのだろうなと考えました。次に、「店内が狭く、車イスの方は買い物をしにくいのではないか。」という意見でした。私はこの意見にも納得しました。車イスではないのですが、小さな子がショッピングモールなどで乗るカートがあります。ショッピングモールの中に入っているお店はほとんどが狭いです。私が買い物に行った時に、人とすれ違うことがやつとなくらい狭いお店がありました。そんなお店の中に、小さい子が乗っているカートを押している母親がいました。その母親は、見たいコーナーが狭くてカートを押し入れないので、人がいなくなるのを待ってから見ていました。きっと車イスの方も同じように、見たい物を見れずいたりするかもしれません。その他にも、「物が高い所にあつて取りづらい。」や、「値段が書いてあるが、目が見えない人にとっては不便」など、たくさんの意見が出ました。他の班と意見を交換した時にも、私たちが気付かなかった所までよく見

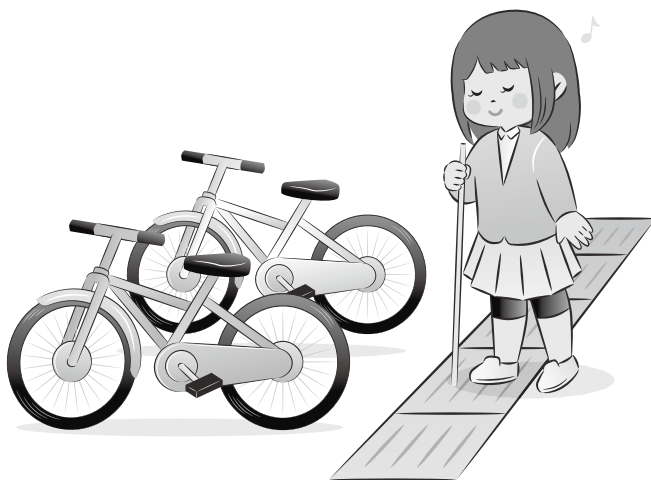
ていました。買い物に行くだけでも、こんなに不便なことだらけなんて考えたこともありませんでした。この学習が終わった後はビデオを見ました。障害者の方は私たちと違い、階段を上るのも大変です。そのため、エレベーターを使うことでスムーズに移動ができるようになります。しかし、ビデオの中では、車イスの人がエレベーターに乗りようとしたけれど満員で乗れませんでした。車イスの方たちはエレベーターを使わないと上の階へは行けません。そのため、譲り合う気持ちが必要なのだと学びました。その他にも、障害者の方たちは、様々な場面で大変な思いをしているのだとこの授業を通して分かりました。

そして授業が終わった後、「あなたにとって障害は何だと思う？ 授業を受けた今の気持ちを書いてみて。」と言われました。私はその時書くのに時間がかかりました。障害って何だろうとじっくり考えました。その時、私は思いました。障害とは、「普通の人用に作られた社会。」だという答えになりました。

この授業を受けてから、障害について考えるようになったり、ユニバーサルデザインに対して興味を持つようになりました。例えば目が見えない人用に作られた、点字プロッ

クというものがあります。私もたまに見かけますが、点字ブロックの上に自転車が止まっているところを見ることがあります。それでは点字ブロックの意味がありません。私はこのような場面を見かけたら自転車をどけるようにしています。友達や家族にも注意するよう伝えていきます。

障害者を理解することで、社会の中の障害をなくしていきましょう。みなさんが不便だと思わなくても視点を変えてみたら、それは大きな障害なのかもしれませんね。





障害者週間のポスター

【知事表彰】



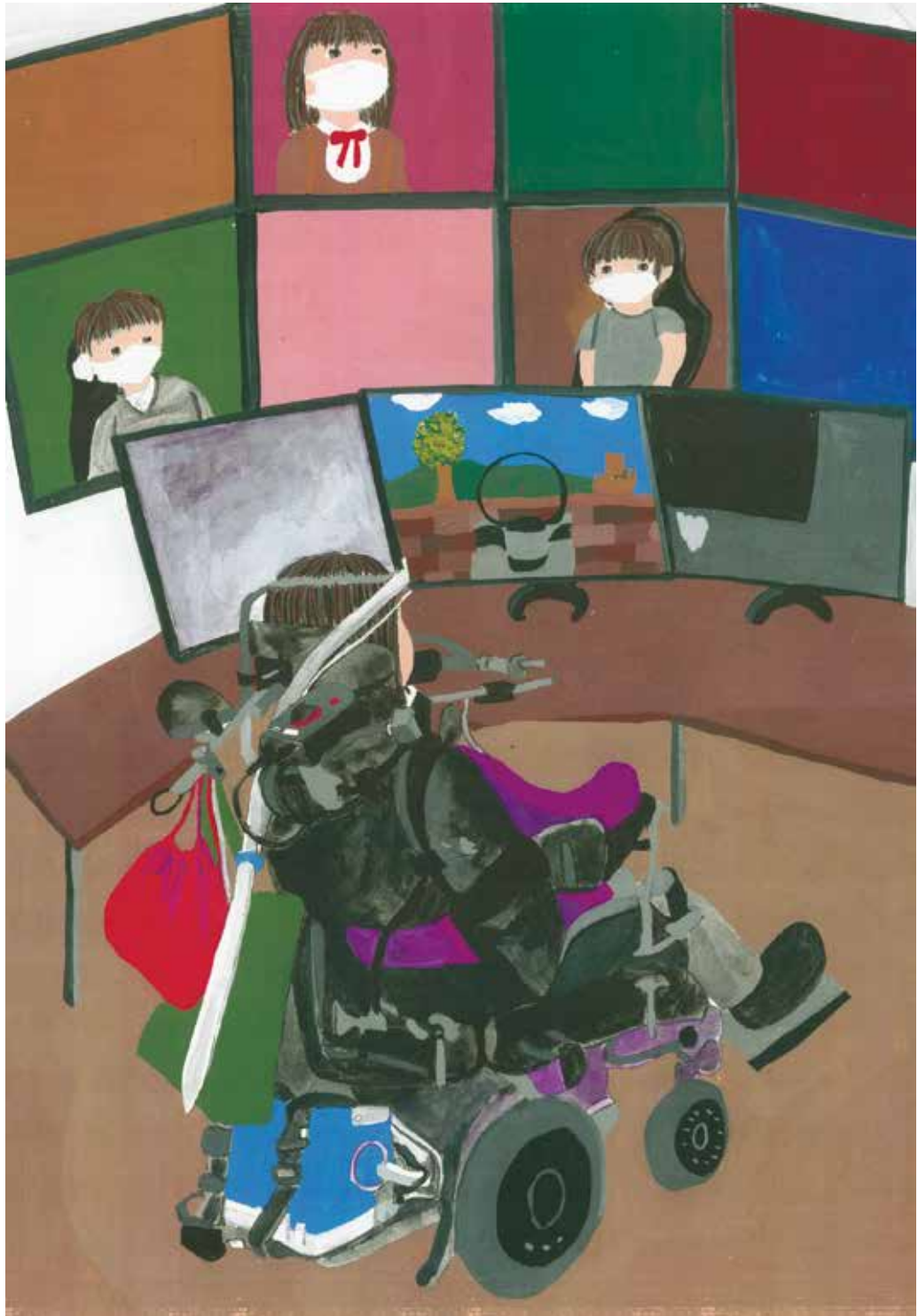


最優秀賞

「おばあちゃんと私と弟でさんぽ」

前橋市立永明小学校

3年 町田 莉々愛



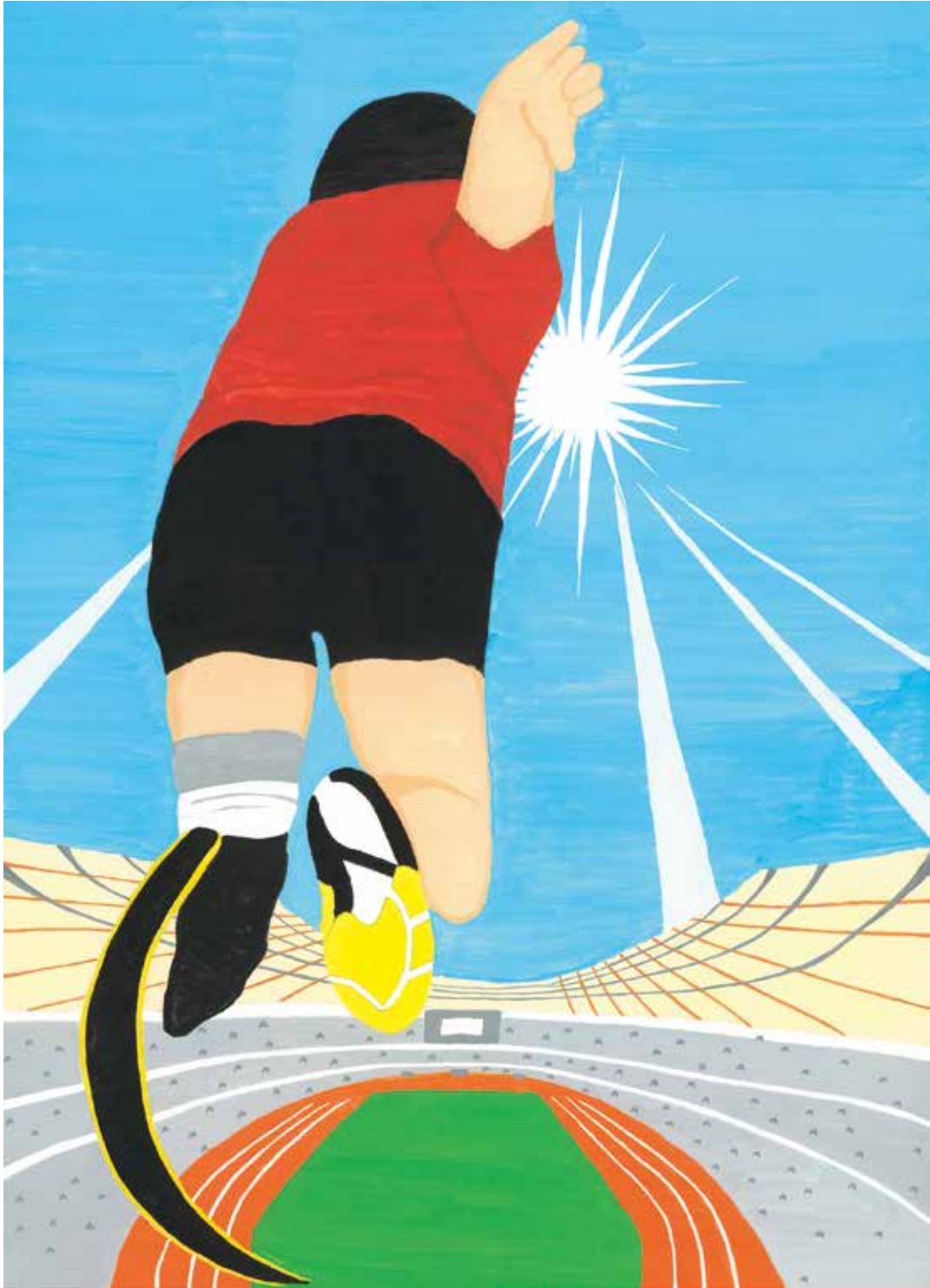
最優秀賞

「どんな人でも夢は叶えられる (eスポーツ)」

藤岡市立西中学校

3年 室田 夏希





優秀賞

「輝く未来へ」  
伊勢崎市立第一中学校  
3年 熊谷 嘉人



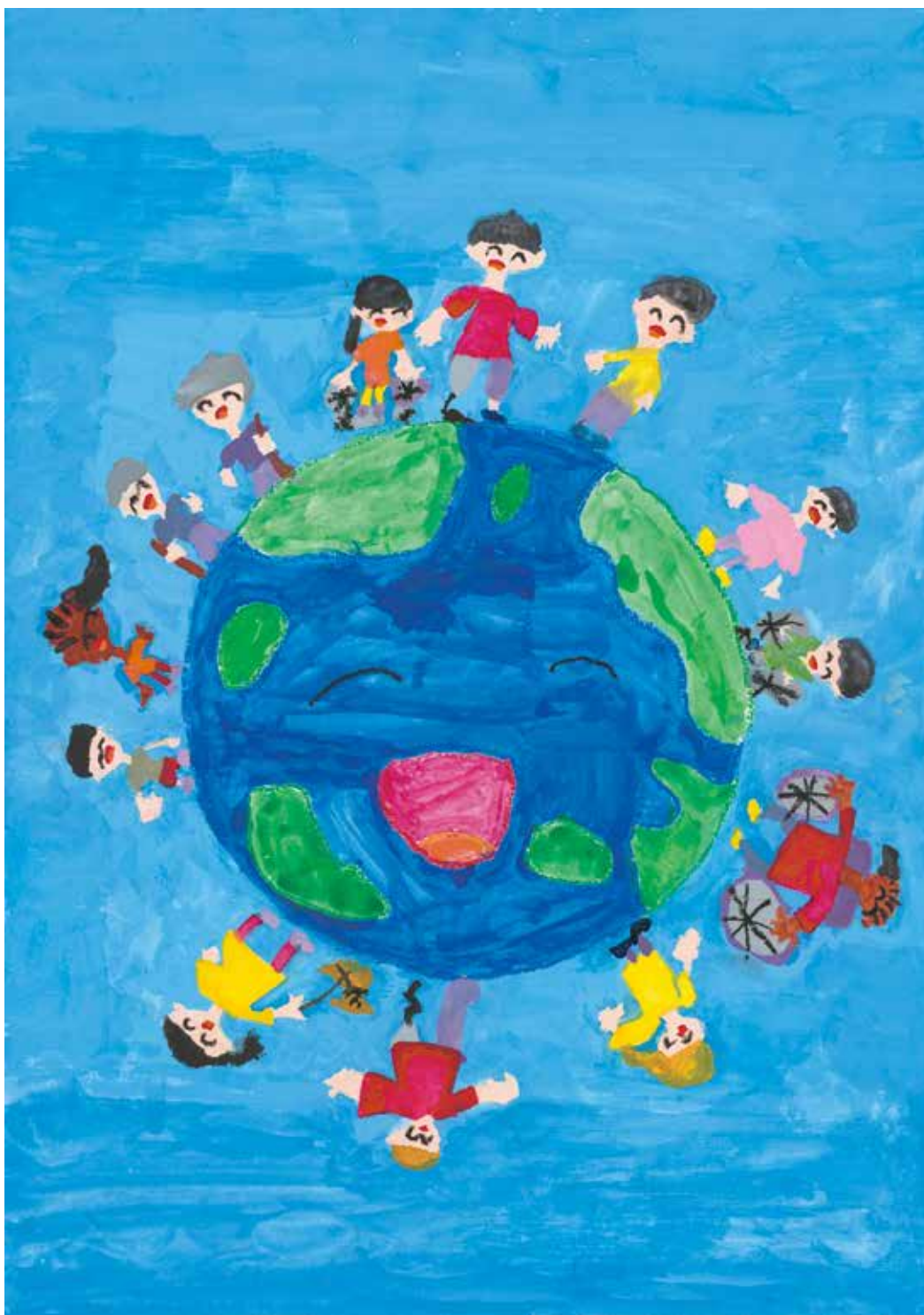
佳作

「可能性は無限大」  
太田市立太田中学校  
3年 久間田 奏

障害者週間のポスター

【肢体不自由児協会会長表彰】





「みんななかよし みんなえがお」  
前橋市立永明小学校  
1年 黒澤 架映



「助け合える社会へ」  
高崎市立第一中学校  
3年 桑子 美咲

……豆知識……

手足の不自由な人のために

○階段で車イスの昇り降りを手伝うときは、二・三人で昇りは前向き、降りるときは後ろ向きで、車イスの人が落ちないように気をつけましょう。

○松葉杖の人や義足の人などが乗り物で困っているのを見かけたら、進んで席をゆずりましょう。

○雨の日は松葉杖の人が困る日です。傘はさせないし、足下はすべる危険もあります。松葉杖の人を見かけたら、守ってあげましょう。

○手足の不自由な人を見かけても、すぐ手を貸す必要はありません。困ったときや助けを求められたときに、はじめて手を貸してあげてください。

手足の不自由な人たちは、人に迷惑をかけるのを、とても心苦しく思うのです。それだけに、こまやかな心づかいが必要です。

令和三年度

「心の輪を広げる体験作文」  
「障害者週間のポスター」

作品集

令和三年十二月 発行

発行所 群馬県健康福祉部障害政策課

群馬県肢体不自由児協会

〒371-8570 前橋市大手町1-1-1

☎〇二七(二二六)二六三四

